

酵母遺伝学フォーラム元会長 高橋俊明先生を偲んで

酵母遺伝学フォーラム（酵母遺伝学集談会）の元会長、高橋俊明先生には、平成15年8月16日、ご病気のためご逝去になりました。享年76歳でございました。ちょうど、昨年の本研究会の直後でありましたので、会員の皆様方にご報告をする機会を失ってしまい、その後、なんらかの形で高橋先生のことを皆様にお知らせしなければと思いつつ、適当な機会も無く時間が経過してしまいました。その間、高橋先生のご逝去をお知りになられた何人ものシニアの会員の方々から、酵母遺伝学フォーラムの設立に非常に大きな貢献をされ、また、我が国の酵母遺伝学研究のパイオニアでもあられた高橋先生のことを、フォーラムの会員、特に若い会員の方々にも知って頂くような記録を残しておくのが、会長としての責務であろうとのご意見を頂きました。そうした経緯もあって、本年の要旨集の紙面をお借りして、高橋先生の御業績と本会に対する御貢献を書き記させて頂く次第です。



高橋俊明先生は、昭和27年3月、京都大学農学部農林生物学科（木原 均教授の研究室）をご卒業後、ただちにアサヒビール株式会社に入社されました。アサヒビールでは、中央研究所の室長、副所長を兼務しつつ、長く、大阪府吹田市にある（財）醸造科学研究所 吹田研究所をご研究の場とされ、課長、次長、副所長、所長を歴任された後、昭和60年の2月に定年によって御退職をされました。33年の長きに渡り企業に所属する研究者として研究生活を送られたわけでございます。アサヒビールを御退職後は、昭和61年、福山大学工学部に設立された生物工学科の教授として、微生物遺伝学、醸造工学な

などを御担当になられ、平成12年3月に定年を迎えられました。

酵母遺伝学フォーラム（旧酵母遺伝学集談会）は、今から35年前の昭和44年に設立されました。酵母遺伝学フォーラム設立の経緯については、昨年、大嶋泰治先生（大阪大学）がフォーラムのホームページに詳しく書いて下さいましたので、ここでは繰り返しません。高橋先生は、その設立に中心的な役割を果たされました。その後、先生は、初代会長故永井進先生（奈良女子大学）、第二代会長故柳島直彦先生（名古屋大学）の後を引き継がれ、昭和53年から昭和60年の、実に7年の長きに渡って本会の会長を務められました。先生の会長の時代に、演題数が38題から80題を超えるまでに急速に増加したこと、また、この頃まで本会の会員は、どちらかというと農学部、工学部など産業界に関係した会員の方々が多かったようにも思いますが、徐々

に理学部や医学部、あるいは薬学部に所属する酵母研究者の方々の参加も活発になり、名実ともに我が国を代表する酵母の研究会になったことなどが思い起こされます。高橋先生は、科学者としてだけでなく、その卓越した事務能力によってフォーラム急成長の基盤を築かれました。

高橋先生の御研究は、ひとつには、木原先生の研究室の御出身らしく、正統的な古典遺伝学の問題、例えば、表現型の分離比や連鎖分析の問題、不規則分離や遺伝子変換の問題、サプレッサーの遺伝学、倍数性やホモタリズムの遺伝学でありました。今では、当たり前と思われるかもしれませんが、温度感受性変異株の分離なども、早くから行っておられたように記憶しています。例えば、接合に関する温度感受性変異株も分離しておられたましたが、その後の接合ホルモンシグナル伝達系についての研究の進展を思えば、大変に先駆的な研究であったように思われます。御研究のもうひとつの流れは、酵母産業に直結した問題、例えば、ビール酵母を想定した四倍体酵母の遺伝解析、硫化水素の発生に関与する遺伝子の同定、胞子形成の問題、フェニルエチルアルコール耐性の遺伝学などでありました。アサヒビールという企業の研究所に所属しておられた研究者としての使命を十分に意識しておられた御研究であったと想像致します。

筆者が高橋先生の存在を初めて存知あげたのは、ある本を通じてです。酵母を材料として研究を始めるようになった学部4年生の頃だったと思います。大枚をはたいて「酵母学」(岩波書店1967年)という本を購入致しました。遺伝学の専門書というわけではありませんが、酵母を勉強する技術者、研究者にとって、酵母の全体像を知る道しるべのような本で、橋谷義孝先生の編になる大著です。その第8章「酵母の遺伝」の章を、219編目の論文を引用して、45ページに渡り執筆した先生として、初めて高橋先生の存在を知りました。筆者は、フォーラムには、学部4年生の時の第4回研究会(京大楽友会館)から参加をさせて頂くようになりましたが、研究会で初めて実物の高橋先生にお目にかかり、先生の低音で、もの静かな落ち着いた話し振りにすぐに魅了されてしまいました。酵母の形質転換が報告されたのが、高橋先生が会長に就任された昭和53年(1978年)であったことを考えて頂くと、若い会員の方々にも当時の状況を想像して頂けるかと思いますが、当時、現象の遺伝学的解析法としては、古典遺伝学の方法しか無い時代に、四分分子分析によって、色々な問題を丹念に解決される姿勢は、酵母を材料として研究を始めたばかりの一学生を益々酵母を好きにさせるに十分なものでありました。我々学生にとっては雲の上の人ではありましたが、懇親会などではとても気楽に、そしてゆったりと話をして下さったことが懐かしく思い出されます。

アサヒビールを退職され、福山大学に赴任された頃に、少し体調をくずされたと同いしましたが、その頃から研究会にも御出席になられなくなり、その後、残念ながら筆者も久しくお目にかかる機会がありませんでした。今年こそ、ふらっと研究会に参加をして下さるのではないかと、毎年そんなことを思いつつ何年も過ごしてしまいましたが、ついにその機会も永遠になくなってしまったことを思いますと、本当に残念でなりません。

たったの27名から始まって、現在500名近い会員を擁するまでに発展した酵母遺伝学フォーラムの礎を築かれた高橋俊明先生のご冥福をお祈り申し上げます。

平成16年7月記 原島 俊(2003-2004年度 酵母遺伝学フォーラム会長)